



2018年10月発行 第54号 吉祥院こども診療所発行

世界の百日咳患者数は年間約1,600万人で、その約95%は発展途上国のこどもです。小児の死亡数は19.5万人にのぼるとされています（WHO発表）。大人を含め、いずれの年齢でもかかりますが、死亡者の大半を占めるのは1歳未満の乳児、特に生後6カ月未満の乳

日本では1968（昭和43）年から、ジフテリア（D）百日咳（P）破傷風（T）のいわゆる三種混合ワクチンが開始。2012年10月から不活化ポリオを含めた四種混合ワクチンとして、実施されています。もちろん定期接種です。その結果ほとんどのこどもたちが1歳半頃までに、百日咳のワクチンを4回接種しています。

# 百日咳って 知っていますか？

**でもね…  
ワクチンの効果は数年で消失**

ここからが本題です。  
あなたのお子さんの咳、長いこと続いていませんか？

あれ？そういえば1ヶ月前から続いているかも？熱はでえへんけどな～

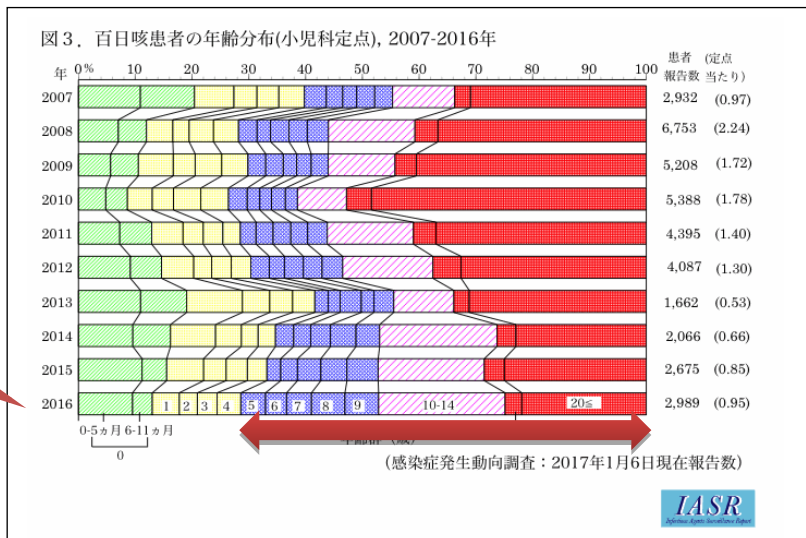
そんな方、もしかしたらその咳、百日咳かもしれません。  
残念ながら、乳幼児期に受けたワクチンの効果はとっくに切れています。  
医療界では常識ですが、大人を含めて、隠れ百日咳の人は予想以上に多いのです。

ええ～っ、  
うちワクチン全部受け  
させてんで～



年長児と大人の  
割合が高いです

<裏面に続く>





咳だけやろ？  
隠れ百日咳で、  
なんか問題なん？

う～ん、難しいところですが、実は大人にとっては大きな問題にならなくても、生まれたての赤ちゃんにとっては命に関わります。見過ごせない問題なのです。  
(臨床経過参照)

1992～1994年の米国での調査によると、致死率は全年齢児で0.2%、**6カ月未満児で0.6%**とされています。そもそも百日咳ワクチンは赤ちゃんの命を守るためにあります。



### 臨床経過

- ① カタル期 (約2週間)
- ② 痙咳期 (約2～3週間)  
発作性・けいれん性の咳となる夜間の発作が多い。年齢が小さいほど症状は非定型的。  
乳児期早期では特徴的な咳がなく、無呼吸発作から呼吸停止へと進展することがある
- ③ 回復期 (約2週間)

## 早期診断・早期治療ができるようになりました

実はこれまで百日咳を診断するのは、簡単では無かったのですが、近年、百日咳の**新しい検査法 (LAMP法)**が保険適応となり、診察室で早期に百日咳を見つけることができるようになりました。

同時に百日咳の診断基準も見直され、医療界における百日咳問題は今、大きく変わりつつあります。



近い将来、年長児 (5～6歳) 対象に百日咳ワクチンの追加接種が始まることが予想されます。(他の先進諸国ではとっくに定期接種となっています)

現在11歳12歳を対象に定期接種となっている二種混合ワクチンも、いずれ百日咳を加えた三種混合になるはずですよ (他の先進諸国ではとっくに定期接種となっています)

ここを手直しするのが一番手っ取り早いので、一日も早く、二種を三種にしてほしいです。

